人通り減っても人情昔のまま。僕には新鮮

商店街活性化 学生ら移住 街にとけ込む

「住みコミュニケーションプロジェクト」三宗代表

店主と話に花を咲かせる三宗匠さん（右から2人目）ら（神戸市の稲荷市場で）

「学生が商店街に住み込み？」。知人から聞き、それを確かめに8月上旬、神戸市中央区と兵庫区にまたがる入江地区を訪れた。かつて造船業で栄えた街だ。国道2号沿いに「稲荷市場」の文字が古ぼけた看板を見つけた。やや黄色っぽい照明に揚げ物、お好み焼きなどのにおいが広がる空間に彼らはいた。

「住みコミュニケーションプロジェクト」と名付けた試みで、神戸芸術工科大（同市西区）の学生や卒業生らが、商店街の活性化を図ろうと、空き店舗などに〈集団移住〉している。代表はOBで会社員の三宗匠さん(26)だ。

南北約300㍍の商店街は下りたシャッターが目立つ。最盛期の1970年代は約90軒あったが、郊外型店の進出や経営者の高齢化で活気を失ってきた。さらに阪神大震災が追い打ちをかけ、営業しているのは25軒ほどになった。プロジェクトのメンバー9人は、空いた店舗や周辺の民家など8軒で暮らし、そこから大学や会社に通う。

きっかけは2002年。大学と商店街が連携したアートイベントで「人のつながり」に魅力を感じた三宗さんらが、「定住すれば、食べたり、生活雑貨を購入したりして新たな消費や動きが生まれる」と03年6月、プロジェクトを始めた。

商店街南端にある、エアコンがなく開け放った事務所で取材中、「暑い中、ご苦労やな」と商店主らがお好み焼きやジュースを届けてくれた。人通りは減っても人情は昔のまま。「神戸市西区のニュータウン育ちの僕には新鮮なんです」と三宗さんが笑った。

「雑誌と同じテーブルを作って」「猫に餌をやらないように呼びかけるポスターも」。地元から事務所への様々な依頼は、大学で学んだ技術が生きる。昨年4月から住み始めた同大学特別研究員の赤松麻衣さん(26)は、喫茶店に頼まれて、梅シロップの商品ラベルをパソコンで作った。「代金」は断ったが、代わりにパンの耳をもらった。「自分に出来ることをやっただけ。無理せず、地域と自然につながっていきたい」と話す。

同市場南栄会会長の六條進さん(60)＝写真上＝は「三宗君たちが来てから活気が出てきた。街との接点を見つけ、若い感性を大切に活動を続けてほしい」と期待を込める。5年前に生まれ育った商店街を離れ、社会保険労務士として働く大畑雅一さん(32)＝写真下＝は、2年前に戻ってきた。「若い人たちが街に溶け込んでいるのに驚いた。一緒にここを拠点に仕事していきたい」と話す。帰り際、「また、遊びに来て下さいね」と三宗さんが声を掛けてくれた。〈商店街の住人〉としての温かさを感じた。

（中村隆）